

チ（作業側顆頭の前後規定）を規定できた、つまり、3要素を規定可能な咬合器であった。

3 Hanau 10 年間の軌跡

かくして、21 世紀の現在、Hanau 没後も Hanau 咬合器の進化は続いたが、Hanau 自身が持っていた全調節への情熱は忘れ去られてしまっている。咬合器の世界に入ってわずか 10 年で Hanau は 49 歳で去って行った。Hanau が生きた晩年の 10 年間は歯科界への熱い情熱で捧げられた。彼の最初期の論文のタイトルは「Dental Engineering」であったが、単なるタイトルではなく、Hanau が歯科界に向けた切実なメッセージであった。歯科学はサイエンスでなくてはならず、補綴学は Engineering を基盤に据えなくてはならないと最後まで訴えたのである。彼の Dental Engineering に込めた思いを忘れてはいけない。Hanau の意志は必ず再発見され、再評価されるであろう。

5) 愛知県歯科医師会、歯の博物館所蔵の木床総義歯 3 床の研究～義歯口蓋粘膜面に和紙の密着した木床義歯の一例～

A Study of Three Wooden Dentures that are owned by the Dental Museum in Aichi Dental Association

～A Case of Relining of Wooden Denture using Japanese Paper～

牛田デンタルクリニック 牛田 正行

Masayuki Ushida, Ushida-Dental-Clinic

愛知県歯科医師会「歯の博物館」所蔵の木床総義歯 3 床について、化学的、物理的に分析を行った。

分析方法

1) 木材の種別の分析

光学顕微鏡、放射光 X 線マイクロトモグラフィ、実体顕微鏡により、木材の道管径の大きさ、配列などの解剖学的特徴を観察し、その種別を判別した（京大大学生存圏研究所杉山淳司教授に分析を依頼）。

2) 義歯口蓋粘膜面に付着した和紙の分析

顕微鏡観察、繊維反応液（C 染色液）反応結果、FT-IR 分析、X 線分析より和紙の繊維を分析した（宍倉ペーパーラボ、宍倉佐敏と、高知県立紙産業技術センター、遠藤恭範に分析を依頼）。

3) 義歯表面の黒色部、義歯内面の白色付着物、並びに人工歯の分析

蛍光 X 線分析、FT-IR 分析により、含有元素を分析した（住友金属テクノロジー株式会社、研究支援事業部、解析技術部、分析技術室課長、渡邊氏に分析を依頼）。

分析結果

① 上顎木床総義歯

木材の種類はサクラ属。口蓋粘膜面に和紙が密着している。和紙は、70%が楮、30%が苧麻の繊維でこのような和紙は、横山大観の時代（明治中期）の日本画専用紙と思われる。繊維の周囲に黄色の細かい異物、ドーサ（膠とミョウバン）がみられる。義歯表面の黒色部は、お歯黒。

② 上顎木床総義歯

木材の種類は、ツゲ属。白色人工歯は蠟石。愛知県刈谷市の庄屋（男性）が、明治初期に使用していたもの。

③ 下顎木床総義歯

木材の種類は、カキ属。義歯表面黒色部は、お歯黒。義歯前歯部粘膜面の白色付着物は、歯石。

考 察

木床義歯の材質や付着物について、化学的、物理的に分析した文献は希で、今回は、非常に興味深い結果が得られた。

1) 木材の種別

従来は、ツゲの木を使用したものが多いといわれていたが、今回は、ツゲとサクラとカキの木から作られていた。

2) 義歯口蓋粘膜面に付着した和紙

義歯内面を口腔粘膜に密着させるため、複数の和紙を暖めた膠で義歯口蓋面に密着させて口腔内で適合させたと推測した。その時に粘膜面に和紙のドーサ処理をした面を向けることにより、膠が溶け出さないように配慮していたのではないかと考えた。

3) 義歯表面黒色部, 白色付着部, 人工歯

元素分析により, それぞれ, お歯黒, 歯石, 蠟石と分析した.

6) 『雨月物語』にみる秋成の口腔観 (その 2)

“Ugetu-Monogatari” and Dentistry (Part 2)

医の博物館 西巻 明彦
日本歯科大学 屋代 正幸

Akihiko Nishimaki, *Museum of Medicine and Dentistry*
Masayuki Yashiro, *Nippon Dental University*

『雨月物語』は, 上田秋成 (1734~1809) の著で, 1776 年の刊行である. 上田秋成は, 国学者であり医師でもあるが, 『雨月物語』刊行時は嶋屋の当主であった. 嶋屋が火災により焼失して破産した後には医師へ転職している. 『雨月物語』は, 五巻本で, 巻之一「白峰」, 「菊花の約」, 巻之二, 「浅茅が宿」, 「夢応の鯉魚」, 巻之三「仏法僧」, 「吉備津の釜」, 巻之四「蛇性の姪」, 巻之五「青頭巾」, 「貧福論」で構成されている. この話は, それぞれ円環状に配列されていると同時にそれぞれ対応性に作成されていることが大きな魅力のひとつとなっていると言われている. 今回, その中の「夢応の鯉魚」を取りあげ, 秋成の口腔観の一端を考察した.

「夢応の鯉魚」は, 仮死状態になった僧が, 夢の中で鯉に変身し琵琶湖を泳ぎまわりますが, 漁師につり上げられ鱸にされる寸前に生き帰るという物語である. 「夢応の鯉魚」の原典は, 白話小説「薛録事魚服証仙」(『醒世恒言』), 「魚服記」(『古今説海』説話集), 『太平広記』, さらに日本の『古今著聞集』がたくみに組み込まれている. 本編には一図, 絵が挿入されている.

「夢応の鯉魚」の背景となっているのは, 風景描写の美しさで, 「まづ長等の山おろし, 立ゐる浪に身をのせて, 志賀の大湾の汀に遊べば, かつ人の裳のすそぬらすゆきかひに驚かれて, 比良の高山影うつる, 深き水底に潜くとすれど, かくれ堅田の漁火によるぞうつつきなき. ぬば玉の夜中の渦にやどる月は, 鏡の山の峰に清て, 八十の湊の八十隈もなくておもしろ. 沖津鳩山, 竹生嶋, 波にうつろふ朱の垣こそおどろかるれ. さしも伊吹の山

風に, 旦妻船も漕出れば, 芦間の夢をさまされ, 矢橋の渡りする人の水なれ棹をのがれては, 瀬田の橋守にいくそたびか迫れぬ. 日あたたかなれば浮び, 風あらしときは千尋の底に遊ぶ.」とある. この描写に対して三島由紀夫は, 「秋成の企てた窮極の詩」と絶賛している. これは, 鯉になった主人公の興義が, 夢の世界に遊ぶ重要な描写である. 物語は, 仮死→夢→夢と現実の間→現実と転回している. 興義は, 仮死状態の夢の中で海若より, 権に金鯉が服を授けて水府のたのしみをさせ給ふ. 只餌の香ばしきに味まされて, 釣の糸にかかり身を亡ふ事なかれ.」と, 捕食による身の破滅を注意される. それに対し興義は, 水中に遊ぶもやがて, 「急にも飢て食ほしげなるに……中略……遂に餌をのむ. 文四はやく糸を収めて我を捕ふ.」と記され, 捕食により漁師にとらえられてしまう. 莊子齊物論第二にみえる「昔は莊周夢に胡蝶と為る. 栩栩然として胡蝶なり. 自ら喩しんで志に適するか, 周たるを知らざるなり. 俄然として覚むれば則ち遽々然として周なり. 知らず, 周の夢に胡蝶となるか, 胡蝶の夢に周と為るか.」という寓言が背景に存在する. 本来夢の世界で空腹になるという事は少ないと考えるが, 空腹というキーワードは, 現実世界に戻るひとつのシグナルであるし, 捕食という行為が夢の世界と現実の世界の扉となっていることが注目される. 秋成の怪異性は, この後, 鯉の興義が, 壇家の平の助の館で鱸とされる寸前で蘇生する点が現実世界として描かれている点にある. つまり, 夢の世界と現実世界が時間と空間において合致しており, 「『仏弟子を害する例やある. 我を助けよ我を助けよ』と哭叫びぬれど聞入ず. 終に切るるとおぼえて夢醒たり」と記され, 続いて『人々大に感異しみ, 「師が物がたりにつきて思ふに, 其度ごとに魚の口の動くを見れど, 更に声を出す事なし.」』とあり, 夢の世界のでき事は, 発音として現実世界に伝わらないことが物語られている. また, 前半において興義が仮死状態に陥っている時に, 「只心頭(むね)あたりの微の暖なるにぞ」という文章があるが, 魚服記には「心頭(しんとう)微かに暖かなり」とあり, 「心頭」は本来上焦部分に相当するが, 『雨月物語』には, 「むね」と読ませており, 身体名がしだいに限局して使われている傾向もうかがえる.